

「その町の平安を祈れ」（エレミヤ二九章四〜一四節）

1 戦後七四年

今日は平和聖日です。また、先週に引きつづきキリスト教学校の日としても覚えていきます。

キリスト教学校の日は、キリスト教学校に学んでいる生徒さん、学生さんに教会のことを知ってもらいたい、とくにこの夏休み期間中、ぜひ来ていただきたい、そんな思いで私たちが始めたものですが、平和聖日は、日本キリスト教団が全体で決めて覚えている日です。今は私たちだけでなく、カトリックも含め、他の教派も、第一日曜日ではなくても、八月にそうした平和の日、平和祈禱日など、もうけているところが多いのではないかと思います。

八月は、私たち日本人にとっては、戦争の歴史と記憶にからむ特別な時です。今から七四年前、一九四五（昭和二〇）年、八月六日に広島、九日に長崎と原爆投下があり、ポツダム宣言を受諾し、一五日に終戦に至ります。こうしてほぼ一五年間つづいた、中国との戦争からはじまって欧米を相手にする世界戦争まで、戦争の時代によく終止符が打たれたのです。

戦後、日本は再出発を余儀なくされた。到来した新しい時代、過ちを省み、むしろ希望をもって再出発したのです。その証しが現在の日本国憲法です。「憲法改正」なる言葉が近年ちまたをゆきかかっていますが、そのターゲット「標的」は第九条にあります。しかしそことうたわれた、戦争はしない、戦争をするための軍備はもたない、この平和主義は堅持しなければなりません。そうでなければ、私たち日本人が戦争で払わざるをえなかった多大な犠牲は、この時代に生かされなくなってしまふ。教団が一九六二年に平和聖日を制定したときの思いも同じです。戦争と、それに加担した教会の在り方を反省し、国際社会の中で協調して平和を守り、核廃絶を求めていくということにあつたのです。

ただ今年で戦後七四年が経過し、戦争を知っている、その時代を生きていた人は少なくなっています。先日ある雑誌（世界、八月号）を見ていて、「戦友会」という組織がほとんど消滅していることを知りました。私の父なども時折出かけていた記憶があります。若い方には分からないかも知れませんが、生き残った、かつての兵隊仲間の中で、部隊が同じだったり、まさに同じ釜の飯を食い、生死をともにした人たちの集まりです。自然発生的に生まれ、一九六五〜六九年頃がピーク、全国に数千の戦友会があり、数十万から数百万の人が集まっていたようです。私の読んだ雑誌の記事は第二師団（福島、新潟、宮城）勇会がどうなったか追いかけていて、二〇〇七年に高齢化のため解散しています。会員の皆さんが九〇歳代の半ばに達し、遺族も高齢化し、会は立ちゆかなくなつたのです。

少し前までは戦争体験の「風化」などという言葉が使われていましたが、風化というのは、実体がまだあって、それが薄らいだということでしょうけれど、戦争に関しては今はもうまったく昔のことで、消えつつあります。それは今の日本の政治にも

影響を与えています。そうした中で戦争の歴史や実態をどのように伝えていくか、平和の大切さをどのように訴えていくか、それは日本人みんなの、また教会の課題でもあるのです。

2 エレミヤの勧め

今日の聖書箇所を見てみましょう。旧約聖書です。エレミヤという預言者がいました。今日の箇所は彼の手紙の一部です。少し事情を説明してから、手紙に記されたエレミヤのメッセージに耳を傾けます。

紀元前六世紀のはじめ、バビロン捕囚ほしゅうという言葉で知られる、イスラエルという国がもつとも過酷な運命に出会っていた時代です。バビロン捕囚というのは当時南ユダ王国と称されたイスラエルが北の大国バビロニアによつて侵略を受け、滅ぼされ、都エルサレムもその中心にあった神殿もみな破壊され、王をはじめとして主立った人たちが、数万人、故郷を追われ、千数百キロは離れた異郷バビロンに捕らえ移された事件のことです。

二回侵略を受けます。エコンヤ王のとき最初の侵略を受け、多くの人が連れて行かれます(二節)。残ったユダの地にはゼデキヤという王が立てられます。バビロニアによる、いわゆる傀儡政権かいらい「支配者の手先」です。ところがこのゼデキヤがバビロニアに反旗をひるがえすのです。そのため最初の侵略から十年たった前五八七年、ユダは、再び、二度目の、決定的な侵略を受けて、滅びるのです。

エレミヤという預言者は、この南ユダ王国の人で、苦難の歴史を民と一緒に体験していました。ただ彼は、最初の侵略の時には、バビロンに連れて行かれず、エルサレムに残されます。都に残った預言者の一人として、つまり二度目の侵略を受けることになる時を預言者として過ごすことになりました。

かろうじてまだ残っていた、最初の侵略を受けた後の南ユダ王国、その都エルサレム。人々は不安におびえながら生活していたはずですが、いつ何時また侵略されることになるかも知れない。不安の中にいろんな思いが渦巻いていました。その民に、神の言葉を聞き取って伝えるのが預言者です。

民の心をつかんだように見えた預言者がいました(二八章)。ハナンヤという名の人です。最初の侵略から四年後、民にこういったのです。神様はこうおっしゃっている(預言者の常套句じょうそうく)、二年以内に、わたしは(神のこと)、バビロンの王を打ち砕いて、運び去られた神殿の祭具など、またこの場所に持ち帰らせる、だから安心していいと。最初の侵略も予想したほどではなかった。神殿の祭具は持ち去られたけれど、建物も町も残った。樂觀論が受け入れられる素地があったのです。敵は攻めてこない。大丈夫。そのままがいい。悔い改めなど必要ない。生活を変えるなどしないでいいというわけです。

だれでも甘い言葉に吸い寄せられます。民の多くはハナンヤの言うことに耳を傾けたと思います。しかしエレミヤは激しく反発します。エレミヤはこのままではバビロニアの再びの侵略は避けられないと見ています。神の言葉を使って民を安心させよう

とするのは、偽預言なのです。そうした偽りの安心を語る偽りの預言に聞き従ってはならないと語ります。

エレミヤはむしろ、バビロンの王に仕えて、命を保つようにせよ、再びの戦争で都を廃墟にしているのかと、民に訴えます（二七・一七）。かく言うエレミヤとは、やつてもみないのに、はじめから負けること、失敗することを想定して事に当たる、気概に欠けた、一種の敗北主義者、事なかれ主義者ともいうような預言者なのでしょうか。決してそうでないことをこの後申し上げます。

遠くバビロンに連れて行かれた人々はどうしていたのでしょうか。彼らの大きな心の痛みは、エルサレムの神殿から、それを中心とした生活から切り離されたことでした。そのことで心が萎えてしまっていた人びとがいたと思います。他方、本国エルサレムにいた預言者ハナンヤと同じような樂觀論を唱える預言者たちもバビロンにはいたのです。捕囚はすぐ終わる。われらの主なる神がバビロニアを撃ち、終わらせてくださると。ここバビロンでの生活は一時のことであり、そこにとけ込んだり、その土地の人と仲良くするなどということは、しないでいいと考えている人々です。こうしたバビロンにいる同胞に、エレミヤが、エルサレムから出した手紙、これが今日の箇所です。

イスラエルの神、万軍の主はこう言われる・・・家を建てて住み、園に果樹を植えてその実を食べなさい。妻をめとり、息子、娘をもうけ、息子には嫁をとり、娘は嫁がせて、息子、娘を産ませるように。そちらで人口を増やし、減らしてはならない。わたしが、あなたたちを捕囚として送った町の平安を求め、その町のために主に祈りなさい。その町の平安があつてこそ、あなたたちにも平安があるのだから（四〜七節）。

驚くほど冷静な助言です。エレミヤがこう言うのは、「捕囚は長引く」（二八節）と考えていたからです。エレミヤはどこを見て、かく言っているのでしょうか。

主はこう言われる。バビロンに七十年の時が満ちたなら、わたしはあなたたちを顧みる。わたしは恵みの約束を果たし、あなたたちをこの地に連れ戻す。わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であつて、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである（一〇〜一一節）。

「バビロンに七十年の時が満ちたなら、わたしはあなたたちを顧みる」。エレミヤが見ているのは、エレミヤが信頼しているのは、神の救いの経綸（計画）です。バビロンに捕らえ移されたことは、神に捨てられたということではない。御心によるのです。それは神の救いの計画によるのです。将来と希望の計画によるのです。そこに立って見るなら、短期的ではなく、長期的な神の視点に立って見るなら、捕囚の地にあ

って、第一に、決して気力をなくしてしまつたはならないということです。それこそが敗北主義です。その上で、その地で落ち着いた生活をする事です。あなたたちの救いは、あなたたちがいま生活している、あなたたちにとっていわば敵である人々の救いともにある。その町の平安があつてあなたたちにも平安がある、その町の平安を祈れ！ 平安とは平和と繁栄と訳してもよい言葉です。

3 平和への祈り

その町の平安を、その町の平和と繁栄を祈れ、このエレミヤのメッセージを私たちはどのように聞いたらよいでしょうか。この町とは、仙台や日本だけではないでしょう。私たちが属するさまざまの共同体でもあり、隣人だけでなく、隣国のことでもあると思います。韓国のため、北朝鮮のため、中国のために平安を祈るということでもなければなりません。

もっと大きな言い方をすれば、私たちはこの世の平安を求め、平和と幸いを求めて祈るのです。

こうしたエレミヤの言葉はイエスの言葉も思い起こさせます。「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」(マタイ五・四四)。エレミヤはまたここで祈りが聞かれると語っています。

あなたがたがわたしを呼び、来てわたしに祈り求めるなら、わたしは聞く(一二節)。

今日は平和聖日、平和に関するイエスの有名な言葉の一つに、「平和を実現する人々は、幸いである」(マタイ五・九)というのがあります。「実現する」は、「造る」(聖書協会共同訳)とも、「つくり出す」(口語訳)とも訳してよい言葉です。平和を造る人、つくり出す人は、幸いである。聖書は、平和というのを、与えられるもの、したがって待っていればよいものとは考えていません。幸いなのは、すなわち、神の祝福に預かるのは平和をつくり出す人々です。そしてそれは祈ることから始まるのだと思います。

今日のはじめに、戦争を実地に知っている人が少なくなる中で、どのようにこれを伝え、平和の大切さを感じ取っていくかということを申し上げます。この前七月二三日の朝、尚綱学院中高の礼拝に行ったとき、ステージの正面に、平和七夕に飾る折り鶴が、何本も飾られていて、びっくり、また感動しました。こうやって伝えられていくのです。今日の一〇時礼拝の後、私たちもささやかな平和の集いをもち、戦争中のキリスト教学校で学んだ経験をお聞きすることになっています。こうしたことをつづけていくことが、やはり大切です。私たちのこれまでの歩み、歴史をしっかりと見つめる。忘れない。向き合う。そのことによって、次の平和な新しい世代が生まれるものと確信してやみません。

(二〇一九年八月四日 平和聖日)